

Ⅲ 今月のトピックス

【穀物輸出大国を目指すロシアが抱える問題】

2009/10年度のロシアの穀物生産は、前年度を上回る作付けが行われ生育も順調であったことから、豊作であった前年度を上回る史上最高の生産量が期待されていた。沿ヴォルガ連邦管区等を襲った6月の干ばつにより、主要穀物産地では大きな被害を受けたものの、生産量、貿易量ともに高いレベルになると見込まれ、今後の動向が注目されるどころ。

1 世界第5位の穀物生産量(2008/09年度)

ロシアでは、2007年の砂糖価格の低迷からテンサイの作付を減らし、穀物の作付を増やしたことから、昨年度(2008/09年度)4,700万haの穀物が作付けされた。収穫面積は4,400万haで、記録的な豊作のなか1億800万トンの収穫があり、穀物の生産量は世界第5位となった。そのうち国内の消費等に向けられる7,000万トンを除いた3,800万トンが輸出可能となった。

本年6月には、エレーナ農業大臣が「10～15年後には現在の2倍の4,000～5,000万トンの輸出を目指し、世界穀物市場におけるシェアを20%にまで拡大する」旨表明している。

ウクライナ、カザフスタンを併せた黒海沿岸地域は世界の30～35%のシェアを占めるポテンシャルがあるとも言われているが・・・

2 穀物輸出に係るインフラの現状

実際の輸出に際しては鉄道貨車の有無、国の買い付け、国際価格の動向等に左右されるが、特に輸出のためのインフラに大きな問題を抱えている。

(1) ロシアでは6万トン級の船を受け入れることが可能な港はクラスノダール地区にある唯一水深の深い港であるノヴォロシースク港だけであり、それ以外にはロストフ州のアゾフ海沿岸にある3,000～5,000トン級の貨物船しか受け入れられない水深の浅い港がいくつかあるだけである。そのため、主な輸出先は地中海沿岸の北アフリカ諸国、欧州各国、及び紅海沿岸国に限られ、インド洋を越えるためにはクラスノダールまで運び込まなければならない。現在、クラスノダールでは保管倉庫も含め、穀物ターミナルの整備が進められている最中である。

(2) もう一つの問題は輸送用貨車である。大量の穀物輸送貨車が耐用年数を超えて処分されてからは、国内の穀物輸送が難しくなっている。ロシアには32,500両の穀物輸送用貨車があり、そのうちの60%は耐久年数の関係で2015年までに廃棄処分される。

2008年時点で5,000両の貨車が不足し、2013年までにこれが25,000両になるとみられている。カザフスタンにとってもこの問題は深刻で、同国が所有する穀物用貨車が極

図-1 連邦管区別穀物等生産量(2008/09年度)



図-2 南連邦管区ロストフ州周辺



図-3 船積み待つ貨物船(ロストフ港)



めて少なく、ロシアの貨車がふさがっていることから、黒海方面からの輸出が出来ず他のルートを探している模様である。

貨車の更新を行うためには投下資本の回収期間を短縮するために貨物の輸送料金を現行の2倍程度に値上げしなければならないとされている。現在でも穀物輸送料金が他の国々より高く、特に米国と比較した場合、1トン当たりの輸送量が、270kmの距離であれば米国の22ドルに対しロシアは33ドル、距離1250kmでは42ドルに対し55ドル、3500kmでは62ドルに対し83ドルとなっている。

(3) 収穫量が著しく増えている地域では保管問題が切迫した状況となっている。保管能力の不足は、南部で1220万トン、中央では700万トン、沿ヴォルガで500万トン分となっており、ロシア全体で2,500万トン分の保管能力が不足していることになる。そのため、大量に収穫された穀物は不適切な条件下で保管されることとなり、品質の低下を招いている。

現在ロシアにおける輸出のためのインフラは、1ヶ月に出荷できる最大の量約300万トン、シーズンを平均すると200万トンを超えることはないと言われ、年間では2,200万トン前後の穀物を取り扱うのが精一杯のようである。従って、保管場所、及び穀物輸送手段の不足から、港から遠く離れた中央部や沿ヴォルガ地方では極めて低いレベルで価格が形成されており、国の有効な支援策がなければロシアの穀物生産拡大計画の実現にもブレーキがかかることになる。2007/08年度に穀物輸出が1,300万トンに達した時はウクライナの輸送機関の助けを借りたが、2008/09年度はウクライナも自国の輸出を再開し、黒海沿岸の港は自国の穀物でいっぱいになったことから、ウクライナの港を通じての輸出が難しくなった。このため、実際にロシアが輸出できた穀物は2,300万トン程度とみられる。

3 低い収益性

穀物全体の収量はEU諸国のha当たり約5トンに比べ、ロシアは約2トンと低い。黒土地帯を中心に、ロシアの土壌の肥沃性はEU諸国のそれを上回ると言われており、適切な肥培管理を行えば、条件の良いところでは10トンも不可能ではないともいわれる。この原因として考えられるのは、気候条件が厳しいこともあるが、上述のようなインフラの未整備により収益の確保が難しいということもあげられる。昨年度のクラスノダールでのFOB価格は一般的な4等小麦でトン当たり約5,000ルーブル（約170USドル）で、ここから貨車等の国内輸送費を差し引くと、ロシア中央部ではトン当たり約4,000ルーブルの買付価格となる。穀物の生産コストは肥料や燃料代の上昇からトン当たり2,500~4,000ルーブルとなっており、肥料を十分に投与してはペイしないのが実態のようである。ロシアでは現在徹底した農業合理化が図られ、如何に投入費用、労働力を削るかが焦眉となっている。そのため、経営耕地面積は最低でも500haないと成り立たないとされ、土地の集約化が急速に進んでいる。一方で、合理化できない農業企業は破産の危機に陥っている。

4 800万トンの国家備蓄(不良在庫)

昨年度、国内市場の過剰供給を緩和し穀物価格下落を防ぐため、国家の介入による穀物の買い上げが行われ、全体として800万トンの国家備蓄が行われた。しかしながら、昨年度末までにその800万トンが適当な価格で内外で処分できなかったため今年度の在庫として残っており、本年に収穫された穀物の保管場所を圧迫している。この買い上げ、管理にあたり、国営の統一穀物会社が新たに編成されたが、昨年度の莫大な買い上げにより限度額を使い切っており、在庫を適正な価格で販売できない限り新たな買い付けが出来ない状況である。

以上のような国内の問題に加え、販路の確保、新しい市場の開拓が必要とされるが、国内に支払い能力のあるバイヤーが育っていないことなど、課題は多い。

図-4 穀物の生産量と収穫面積の推移

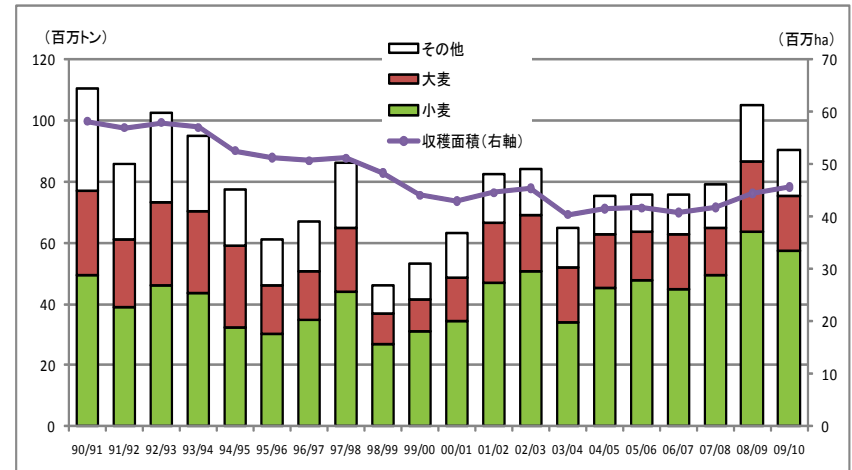
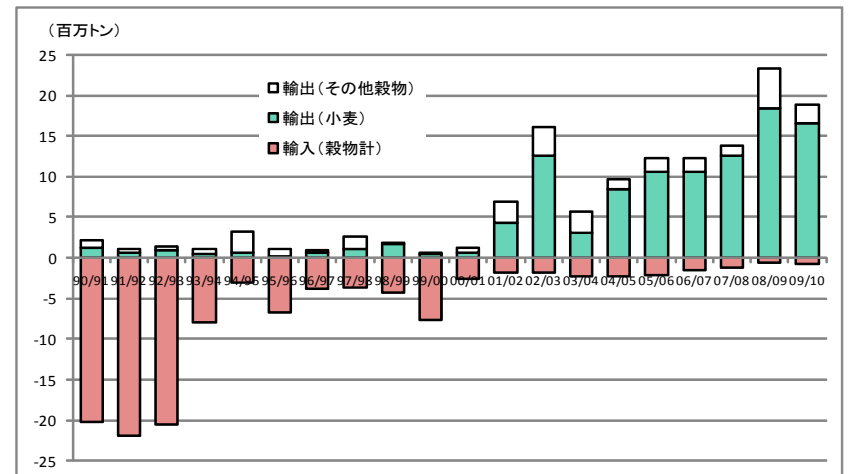


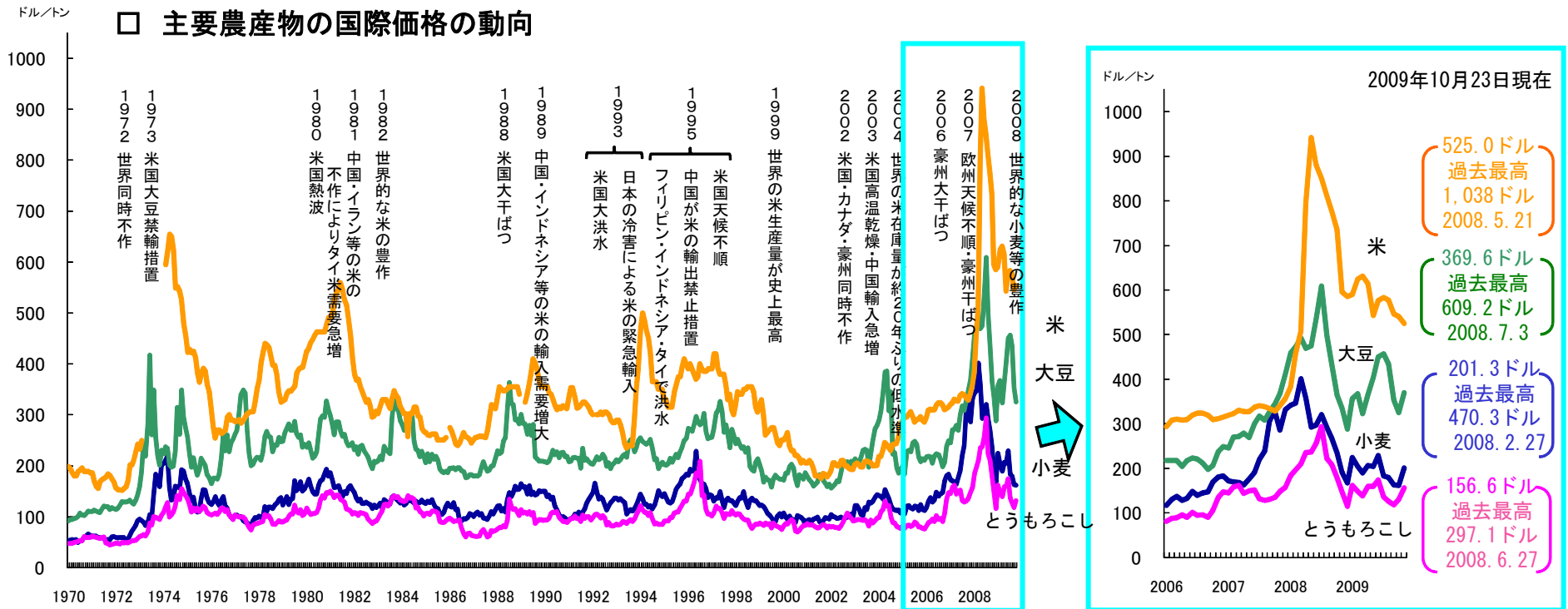
図-5 穀物の輸出量と輸入量の推移



資料：米国農務省「P S & D」Online

(参考) 世界の農産物価格の動向 (ドル/トン)

- 穀物等の国際価格は、2006年秋頃から上昇基調で推移し、2008年春から夏にかけて最高値を更新。その背景には、穀物市場への投機資金流入といった要因もあるが、基本的には、① 中国等の途上国の経済発展による食料需要の増大、② バイオ燃料による需要増大、③ 地球規模の気候変動の影響といった中長期的に継続する構造的な要因のほか、輸出国の輸出規制があった。特に米は、貿易量の割合が低いことから、価格変動幅が特に大きかった。2008年夏以降は、小麦等の豊作予測などに加え、世界金融危機による投機資金の流出、世界的な不況による穀物需要の減退懸念から最高値に比べ大幅に低下した。
- 2008年末以降、南米での干ばつ、米国の天候による作付けの遅れ、中国の旺盛な大豆の輸入需要等により、穀物価格は、再び上昇基調で推移。その後米国が良好な天候に恵まれたこと等から値を下げたものの、現在でも2006年秋頃に比べ1.4~1.9倍の水準。



注：小麦、とうもろこし、大豆は、各月ともシカゴ商品取引所の第1金曜日の期近価格である。

米は、タイ国貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。

注1：各月第1金曜日(米は第1水曜日)に加え、直近の最終金曜日(米は最終水曜日の価格)を記載。

注2：米以外の過去最高価格については、シカゴ商品取引所の全ての取引日における最高価格